

マングローブ生態系に学ぶ

第2回：アジア、中近東、東アフリカ地域におけるマングローブ生態系の重要性

オマーンの歴史は、インドから東アフリカに至る地域との交易を抜きに語ることは出来ない。この交易活動は、冬の季節に吹く北東の季節風に乗って東アフリカに達し、夏の季節に逆に吹く南西の季節風に乗って帰ることが出来るという自然条件をうまく利用したものである。その活動範囲は、遠くザンジバル島にまで及んでいた。自国で生産する穀類、果樹、ナツメヤシといった農産物や乳香に加えて、インド・中国から輸入した布地、銅製品、ガラス製品等が東アフリカ地域で得られる金、象牙、虎皮あるいは黒檀、白檀、チーク等と活発に交換されていた。一時期、この地域での交易活動は完全にオマーン人に独占されていた。そのため、オマーン人は航路に関する情報が豊富で、航海術に長けていただけでなく、造船技術にも秀でていた。千一夜物語に登場する船乗りシンドバッドはスールの港から来たと言われており、スールの古い地名が「2本のマングローブ」という意味であることを考えると、当時からスールにはマングローブが生育していたのであろう。

こうした交易活動とマングローブとの関わりは定かではないが、ダウ船の材料の一部として、ロープや帆布を丈夫にするタンニンや船体を保護するための塗料の原料として使われていた可能性はある。現在、オマーンに生育するマングローブは主にヒルギダマシであり、枝葉は煎じて民間薬として使われていた記録があり、これが船乗り達の健康に貢献していたとも考えられる。2001年にイタリアの考古学調査団が発掘した化石化した船の調査結果によると、この船の骨組みはヒルギダマシで出来ていたらしい。一方、現存林は自然保護区や親水環境として利用されており、サラララでは現在も、それ以外の地域では近年まで葉が代替飼料として主にラクダに、種子は良質な乳を生産させるためラクダと山羊に与えられていたという。マングローブ林に生育している生物として、マングローブガニは市場で高く売れるため、マングローブガキとともに密漁の対象になっている。マフート島では漁期に漁民が一時内陸から移り住むが、島では潤沢にあるヒルギダマシの比較的まっすぐな部分を伐採して作った仮小屋が見られる。

東アフリカのザンジバル島には、ヒルギダマシの他にリゾフォアラやヒルギモドキも生育している。ヒルギダマシは主に丸木船、船の肋材や農具の柄、あるいは燃料として利用されている。一方、直材が得られるリゾフォアラは柱としての利用価値が高く、支柱根は魚を捕るための罟の材料として利用される。このように、インドから東アフリカに至る地域においては昔からマングローブが様々な目的に利用されてきたし、現在も利用されている。マングローブ域は海域と陸域との間にあって両者の移行帯（エコトーン）となっているところである。この移行帯は海と陸の両者から被害と恵みとを受けており、そのバランスの上に成り立っている生態系である。そのため開発による影響を受けやすい自然として、環境アセスメントにおいても特に配慮を要する生態系に指定されている。また、マングローブ生態系が水産資源の涵養にとって極めて重要な役割を果たしていることや、沿岸地域においてはマングローブの枝葉が家畜にとって重要な飼料として利用されてきたことを考えると、生産活動におけるマングローブの重要性が理解できる。これに加えて、近年では沿岸地域での魚釣りやスキューバダイビングを含むビーチ・リゾートの開発に力が注がれている。マングローブ植林による沿岸部の修景緑化は、こうしたリゾート開発の一翼をも担うものである。このように、今後ますますマングローブ生態系の経済的価値は高まっていくと考えられるが、開発地区毎にそれぞれの価値を正しく評価し、それに基づいて将来計画を練り上げていきたいものである。



サラララでのラクダによる利用



マフート島の仮小屋